

ふるさとファイル

展示コーナーだより
第54号
平成25年4月
生涯学習課文化財係



将軍上洛・天皇行幸

～幕末150周年①～

現物の展示期間（図書館休館日は除く）

資料④⑤⑥

平成25年4月3日(水)～5月12日(日)

資料①②③⑥

平成25年5月14日(火)～6月30日(日)

今からちょうど150年前の文久3年（1863）は、京都政局が急展開を迎える年にあたります。前年末に上洛してきた会津藩が京都守護職として本格的に始動するとともに、江戸幕府14代将軍の徳川家茂が将軍としては200年ぶりに上洛、そして孝明天皇も天皇としては500年ぶりとなる石清水八幡宮行幸を実施するのです。一連の出来事が市域に与えた影響について、春・秋2回にわたって紹介します。

江戸への勅使派遣（資料①②）

幕府政治の混乱とともに社会情勢が悪化してくると、薩摩藩の島津久光は秩序の回復を図って、上昇しつつある朝廷権威と陰りをみせつつある幕府権力を結合させる「公武合体」を推し進めようとしています。そこで久光は、文久2年（1862）4月に上洛し、幕政改革を要求する勅使を江戸へ派遣するよう朝廷に働きかけました。

これをうけて翌5月には、大原重徳が勅書（天皇の手紙）を携えて江戸へ向かいます。勅書には、情勢悪化の要因である外国人の排斥（攘夷）が課題として掲げられ、その実現を図るために、将軍以下諸大名を上洛させることなど、三点の要求が盛り込まれていました。

将軍家茂の上洛（資料③④）

文久3年（1863）3月、将軍家茂は朝廷の要求にこたえて、江戸から大坂へ向かい、淀川左岸の京街道等を利用して上洛を果たします。翌4月には、孝明天皇が攘夷祈願のために石清水八幡宮への行幸を実施しました。市内の友岡村は、京街道の宿場町である淀宿の「助郷」に指定され、往来する公人の荷物を運ぶ義務を負っていたため、このような要人の移動に際しては臨時に動員がかけられました。

天皇に攘夷を約束した家茂は、6月に大坂経由で江戸へ帰ります。しかし、一向に攘夷を実行しなかったため、朝廷は再度将軍の上洛を求め、それにこたえて家茂は元治元年（1864）1月に再び入京しました。将軍が京都・大坂間を移動するたびに大きな負担を強いられるため、友岡村は助郷の免除願を提出しています。このような助郷忌避の風潮は、拡大の一途をたどりました。

元々は、京都の朝廷に比較的近い人物が所持していたもの
のようです。勅使の出発とほぼ
同時に書き写されています。

①勅書写（文久3年（1863）5月、神足村文書）

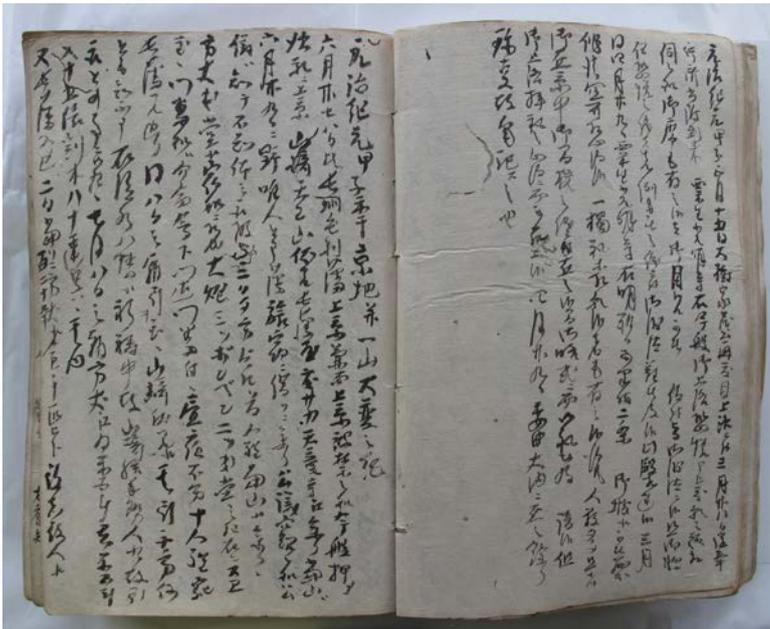
③友岡村助郷人足御免除願下書
（元治元年（1864）10月、鞆岡家文書）



禁門の変と長州征討（資料④⑤）

過激な尊王攘夷思想をもつ長州藩は、文久3年（1863）に京都から追放されました。翌元治元年（1864）になると、京都への復帰を目指して、武装した長州勢が上洛しますが、京都を守る会津藩や薩摩藩の兵の前に敗北します。いわゆる禁門の変（蛤御門の変）です。このとき、市内の光明寺にも長州勢は陣取りました。

幕府はただちに長州藩を成敗するため、第1次長州征討の兵を送ります。それに対して長州藩は恭順の姿勢を示しますが、再び反幕府的な対応をとったため、慶応元年（1865）には第2次長州征討が実施されました。その都度、沿道の村々には物資の輸送や炊き出しなどが強要されました。



④光明寺雑記（元治元年(1864)条、京都西山短期大学蔵）

右のページには將軍上洛につき光明寺がお目見えを願ひ出したこと、左のページには長州勢が光明寺に陣取ったことが記されています。



不逞浪士の増加（資料⑥）

長州藩の動きが象徴するように、幕府の統治が崩れかかっていることは誰の目にも明らかでした。そしてその混乱を收拾するために、幕府は武士へも農民へも、次から次へと新たな負担を命じます。結果的にそれが、幕府への不信感を増長させるという悪循環に陥りました。

こうした社会情勢のなか、幕府にも大名にも属さない浪士と呼ばれる武士たちが、京都の町で思い思いの活動を始めます。浪士のなかには社会の立て直しを本気で考える志士もいましたが、世情に乗じて横暴を繰り返す不逞浪士も少なからずいました。

伏見宮家が、自身の領地である下海印寺村に掲げた高札（立て札）からは、京都に留まらず、西岡と呼ばれた市域一帯まで浪士が徘徊していた様子うかがえます。悪知恵の働く浪士たちは、竹の子や松茸といった高値で売れる当地の特産物に目をつけて乱獲していたようです。



⑥伏見宮家役所高札

（元治元年(1864)3月、中小路家文書）